

関ヶ原の戦い直前の大坂にて

— 慶長5年（1600）7月某日 —



可児市長 可児成神



桔梗紋物語 内田青虹氏寄贈

— はい。父は誇り高き、まことの武士
にごぞいました。世間では逆臣と呼ぶ
者もおりますが、言いたい者には言わ
せておけばいいことです。私にとつて、
花も実もある武士とは、父上のような
御方を置いてほかにはありません—
私は明智玉子。洗礼名は、ガラシヤ
と申します。父・光秀は、美濃の名族
であった土岐明智氏の頭首で、美濃国
明智荘に代々の居城を持っていました。
私は、父が美濃国内の争乱で城を失い、
寄る辺なく放浪していた頃、起居して
いた越前にて生を受けました。当時の
明智家は困窮の極みにあり、母が自身

の黒髪を売って生活の足しにしたほどで
した。しかし、貧しくとも世俗に染ま
ることのない、不思議な美しさが母に
は備わっておりまして。私は、幼心に「何
故母はこれほど美しいのか」と疑問に
思っておりまして。最近になって、我が
子への愛と、いかなる時にも誇りを失わ
ない姿勢が、その美しさの源泉であつた
ことに気付きました。貧しくとも幸せ
だつた家族との日々、母の愛と明智家の
娘としての誇りは『桔梗紋物語』とし
て私の胸の内に生きています。

今、私たちの居る大坂の細川屋敷は、
治部少輔殿（石田三成）の軍勢に囲
まれています。夫（細川忠興）は内
府様（徳川家康）の元に出陣しており、
救いの手は期待できません。治部殿は
大人しく人質となるならば、命までは
取らないと申している様子ですが、私が
『決意』を固めねばならないときが来
たようです。

思えば父・光秀も、去る天正10年
（1582）5月の愛宕山の連歌会で
「時は今 あめが下なる（下しる）
五月哉」の発句を詠み、『決意』を固

めたのではないでしょう。父が信長
公を「生害奉つたのは事実ですが、そ
こには明智一族として、武士としての誇
りがあり、並々ならぬ決意があつたも
のと私は信じています。

我が明智一族は代々、武士の名に恥
じぬ振る舞いを致してきました。大叔
父の光安様は、父を逃がすために明
智城を枕に討ち死になされましたし、
姉が嫁いだ左馬助殿（明智秀満）は、
本能寺での一件の後、姉と共に坂本城
で堂々と果てられました。私も明智一
族の血、誇り高い父母の血を継ぐ者で
す。女だからとて易々と治部殿の軍門
に降り、一時の命を拾うことがありま
しょうや。

— 散りぬべき 時知りてこそ 世の中
の花も花なれ 人も人なれ —

これが私の『決意』です。この一首
を辞世としてくださりませ。人も花
もしかるべき「時」に散るからこそ美
しいものです。汝もそうは思ひませぬ
か？



決意(光秀・愛宕山連歌の会) 内田青虹氏寄贈

今回は、内田青虹氏の『桔梗紋物語』
『決意』（明智光秀博覧会2020 in
可児市にて展示中）にインスピレーショ
ンを受けて書き起こした明智玉子（細
川ガラシヤ）の物語です。

